

第35号 (2005 .12)

Library Mate

パリの図書館スケッチ - 右岸と左岸 -

後 編

CNRS名誉研究員 ドベルグ美那子



17世紀にはようやく復興の兆しが現われる。1619年ルイ13世は荒廃した修道院の精神性と秩序を回復させるためラ・ロシュフコー枢機卿を任命した。彼は5年後の1624年再興事業を完成した。しかし図書館は殆んど空だったので、彼は手始めに自分の蔵書から600冊を寄贈した。こうして再出発した図書館は次第に機能を果たすようになる。1624年を聖ジュヌヴィエーヴ図書館(以下、SG)というの起源とする説もあながち間違いとはいえない。初代館長フロントー師は1636年から任務に就く。彼は精力的多角的活動で図書館の発展に貢献した。パリ大学の要職に就いたこともあるこの碩学の聖職者は9か国語に通じ、中でもヘブライ語、古代シリア語、アラビア語、カルディア語を得意とした。宗教論戦にも参加し、キリシタン時代に

日本にもたらされ印刷されて愛読された「イマチオ・クリスティ(きりすと)に倣いて」の著者をめぐりイエズス会士と対立した。彼の集めたオリエント関係の稀覯書はのちにフランス国立図書館(以下、BNという)に移されたが、彼が1647年に入手した旧ロレーヌの枢機卿の紋章入りギリシャ教父たちの写本はSGに現存している。2代目司書の在任12年間には刊本写本合わせ6000部となったが蔵書はまだ貧困だった。

右岸のBNでは既に本格的図書館が動き出していた。1670年に任命されたクレマン師は刊本の分類に取り組む。この時代右岸と左岸の図書館は相手を意識しつつ競争していた感がある。片や世俗の王権を楯とし、片や聖職者による学問の旗手として。

<写真：右岸と左岸を結ぶカルセルの橋(手前は左岸)向いはルーブル>

SGの蔵書は3代目の司書デュ・モリネ師(在職1675-1687)の時急速に増える。強力な個性の持ち主だった彼は、先ず本そのものに情熱を傾けた。彼にとって本こそは知的好奇心に答えてくれる百科事典的の広い知識の源泉だったのである。更に彼の関心は形を持った具体的可視的なものにまで広げられた。歴史に造詣の深い彼は精力的収集家でもあった。学者や宣教師たちとも交流をもち、珍奇でエキゾチックな物を入手し大きなコレクションとなった。その内容は古代エジプトの鱈のミイラ、古代ギリシャの貨幣、メダイから「一角獣の角」にまで及び、他方宣教地原住民たちの生活用品、衣類なども豊かで民俗学資料として今日も尚高い価値をもっている。これらを収めた博物館が図書館に隣接して作られた。当時としては全く前例のない試みでパリ名物の一つとなり訪問者も多く、更に彼らの寄贈も加わった。現在の建物に移された「一角獣の角」の前に立って首をかきけるのは私一人ではあるまい。

彼のメダイコレクションは有名であったが故に800点が召し上げられ王の陳列室に収まってしまった。彼がSGに遺贈した古銭コレクションの運命については後述することにする。

図書館は性格を変えていった。従来大部分を占めていた宗教書のワクを更に広げ、科学書を加えたのはモリネの卓見である。僧院は「宗教と科学の殿堂」とみなされた。ここでいう科学とは学問全般を意味している。

蔵書保管改善のため1675年には回廊の2階の南側に長い陳列室が建設され、美しい装飾が評判になった。20年後更に延長された。今でも毎年9月の国民遺産建造物「パトリモワヌ」公開日には私たちも見学することができる(現在のアンリ4世高校の中)。

モリネが1683年から87年にかけて作成した図書館の財産目録と書籍目録には、総計2万冊(その中写本400点)が記されていた。再興当初僅か600冊の図書が40年後にはフランスで蔵書数第7番目のランクを占めるまでになったのは、司書の努力とあいまって寛大な寄贈者たちの協力によるところが大きかったからである。もう一つ忘れてはならないことがある。17世紀末に僧院図書館は門戸を開き、研究者たちは自由に閲覧できるようになったのである。この英断は対象者が制限されていたにせよ、図書館本来の使命を示す先駆けとなった好例で高く評価すべきであり、大革命より一世紀も早い。

18世紀に入りSGは二つの軸を中心に更に幸運な発展を見る。一つは多くの寄贈、他は優れた司書の輩出である。先にラ・ロシュフコーはこの僧院をフランス修道会の頭としたが、会員となった外国修道院との交流も盛んになり、そのルートにより寄贈も少なくなかった。既に1693年頃にはプトレマイオス体系による天文時計が入館した。現存するこの種の最古の時計である。後述する司書バングレは天文学者であるが、これを見て啓発されたのか

も知れない。他の寄贈は16世紀ヴァロア朝時代の人物を描いた鉛筆デッサンの肖像画140点で、1861年にBNの版画室に移された。刊本では1710年に入ったランスの大司教シャルル・モーリス旧蔵の1600冊をあげることができる。神学書の他、地理、科学、医学などの折衷的な趣味が濃いのは時代の風潮を反映しているからであろう。音楽の分野では16、17世紀の楽譜や古代音楽理論など貴重の上もない資料も入ってくる。

この頃になると、プレヴォのようにオランダに出かけて書物を購入する司書も出てくる。彼はカタログ作成の準備として蔵書票を初めて用いた人で、後に年代識別には大いに役立った。こうして1754年には最初のフォリオ版の刊本登録簿4冊が完成した。

一方実用性を考慮した建物の美化が進められた。そのプランとは丸天井に採光のため8つの明かり窓をつけ、天井には聖アウグスチヌスの寓意画、書棚が十字に交わる所に胸像を置くというものだった。1720年の起工式には、自ら役を買って出た摂政オルレアン公フィリップによって行われ、13年後に完成した。2年後にはその息子ルイが修道院入りをする。彼は彫刻した宝石、メダイ、古銭コレクションを図書館に遺贈した。高い価値をもつこれらの品は、有名なモリネの古銭コレクションと共に1861年BNに移された。

18世紀後半革命までの約40年間に傑出した2人の司書バングレとメルシェがいる。既に天文学者として知られていたバングレはヘレニズム学者でもあった。1758年の就任後、天体観測所を作らせ、科学書を多く購入した。彼はアミアンやオランダ、遠くはロドリゲス島まで観測旅行に出かけることが多く、留守中の事務は若いメルシェを教育して任せた。弟子は師をしのぐようになり、最初の文献学者の一人となったのである。この二人の時代はSGの最高潮期だった。愛書家であったメルシェの働きは殊に目ざましかった。多くの学者やヴェニスの子・マルコ図書館の司書とも連絡をとり、本の売り立てに注意を払い、購入や交換によって蔵書を増やしたばかりでなく、それを分類整理してカタログを作った。既に出来ていたものと照合し1758年には刊本目録9巻が完結する。写本の方は1754年から1793年までかかった。バングレとメルシェの共著となっているが殆どはメルシェが書いている。彼は1772年に辞職して僧院を去り、革命後も在職したバングレが写本目録を完成した。1790年の財産登録には6万冊(その中写本は2千点)が記されている。



<写真：フランス国立図書館旧館入口>

内容外観共に充実した図書館はパリ名物の一つとなっていたが、更に王侯の訪問という榮譽を得た。1764年にはルイ15世が、1771年にはスウェーデン王フレデリック2世の甥のプリンスが訪れたのである。後に彼はスウェーデン国王となった。僧院の図書館は北欧にまで名が知られるようになったが、それは又夜空を飾る最後の花火でもあった。

やがて大革命となる。聖ジュヌヴィエーヴ崇拜は尚盛んだった。1790年1月3日の聖女の祭日、パリ市長は修道院教会のミサに出席している。だが教会財産没収の運命からは逃れられなかった。僧院の土地と付属物はすべて国有化され、聖職者たちは分散させられた。革命政府は僧院の図書館を右岸の国立図書館に所属させ、蔵書を各図書館に再分配しようとした。パングレはこれに強く抗議し、分散は免れて全体の管理を任せられたばかりか、そのための費用まで受けたのである。この年から僧院はパンテオン学校として新発足し、図書館はそのまま存続した。新任の司書フランソワ・ドヌーはフランスの黒い歴史に加担することになる。ローマに派遣され、トレンチノ条約によってパチカン内に共和国を作りパチカン図書館の貴重本を没収して、彼が他に買い集めた本と共にフランスに送ったのである。宛先はBNとSGだった(これらは1815年の条約で返還された)

1807年僧院の北側にクロヴィス通りを作る際、老朽していた教会は遂に壊されてしまった。パンテオン学校はその後ナポレオン高校、コルネイユ高校と名を変え、現在のアンリ4世高校となり、すぐれた人物を生んだ。ミュッセはその1人である。学校と図書館は行政上の問題で紛争をくり返していたが、結局図書館はパリ市に組み込まれ、本の重みや建物の老朽化を理由に追い立てを喰った。新館は新鋭建築家アンリ・ラブルストに任せ、場所はパンテオン広場のモンテギュー学校(14世紀創設)跡が当てられた。工事は1844年から始まり1850年に完成して、翌年から図書館は公開される。

装飾を排除し単純でしかも荘重、そして実用性を備えたこの近代建築は人々の意表をつくものだった。綿密な計算のもとに、閲覧室は高く細い柱の間隔が広くとられ通風をよくなり、並んだ大きなアーチ型の窓からの採光も配慮された。重さを支えるためには新しい素材の鉄が用いられた。ラブルストはこの試みをのちにBNにも応用している。彼の建築理念は約半世紀後の1899年パリ万国博覧会に登場したエッフェル塔に受けつがれていく。

図書館通いする者にとって開館日と時間は大きな関心事である。17世紀末から学者に閲覧を許可していたSGの場合はどうであろうか? 18世紀の資料によれば、1710年頃は午後2時から5時まで、1735年には毎日数時間、1759年には定期的に月水金の3日間午後2時から5時まで開いていたようである。革命政府は1790年僧院をパンテオン学校とし、図書館を一般に公開した。開館時間は最初

9時から12時、午後2時から日没まで、ついで10時から午後2時までノンストップ、1830年には毎日10時から午後3時までだった。更に新機軸の出現、夜間開館である。1837年には男子を対象に、1893年には女子にも適用された。このシステムは今日も続いており、一般人や学生たちは勿論、私などもその恩恵に浴している。又、短期間ではあったが、館長が認めた場合には館外貸出しも行われた。当時の貸出し名簿にはアラゴ、ミシェレ、近くはデュアメル、ベルグソンの名も見える。

図書館の利用者は市民ばかりではなかった。先にスウェーデン王子の来訪に触れたが、北欧やポーランドから訪れる者も多く、夜間公開は彼らからも歓迎されたのだ。それらの国への興味も増していく。1868年には、デンマーク、ノルウェー駐在フランス領事をつとめたこのあるアレキサンダー・ドゥゾスの北欧図書コレクションが入館した。既にあった蔵書を加え、5年後にはスカンジナビア蔵書となって学者や政府の注目をひく。1903年には1万5000冊に達し、本館の後に建てられた分館は北欧図書館の名でオープンした。行政的にはSGの管轄であるが本国から派遣された関係者が定期的に駐在して協力している。

SGには文豪、芸術家、愛書家たちの寄贈が多く枚挙する暇がない程だが、ここではロマン・ローランとジャック・ドゥーゼのコレクションの名を記しておくにとどめる。

以上2つの図書館の歴史を見てきて明らかになったのは、国立図書館の豊かな蔵書がその多くを聖ジュヌヴィエーヴ図書館に負っていることである。書籍だけでなく、殊にメダイ室や版画室は後者なくしては生まれなかったかもしれない。夥しい数の貴重な本や物がセーヌの橋を渡って南から北へ運ばれて行った。それをめぐって幾つかの悲劇もあったことであろう。しかしその後のSGの活動が示すように、本への愛情と知識欲に燃えた人々の善意に支えられて、図書館の蔵書は再び増えていく。左岸は依然として学問と教育の中心で若々しいエネルギーがある。右岸はそれなりに成熟した落ち着きがある。私はそのどちらも好きだ。

こうして毎日セーヌの此岸と彼岸を右往左往しながら、本を通して新しい知識を得る喜びの中に生きている。

パリにて

参考文献

- M. WINTZWEILLER: La Bibliothèque Sainte-Geneviève de jadis à aujourd'hui (Paris 1972)
- Bibliothèque Nationale de France 2003-2004 (Paris 2004)
- Jean-Michel LENIAUD(sous la direction de) Des Palais pour les Livres. Labrousse Ste. Geneviève et les bibliothèques(Paris 2003)

< 背景 : 聖ジュヌヴィエーヴ図書館内部 >

館内 PC リニューアル！



大学図書館は機械化が開始され10年が経ちました。現在ではどこの図書館に行ってもPCによる蔵書検索や、各種データベースの検索が簡単にできます。インターネットを利用すると、自宅からでも検索できてしまうのが“常識”になりつつあります。10年前の大学図書館は、PC 3台が導入され、一部の蔵書が検索可能となりましたが、まだカード目録が主体でした。当然イ

ンターネットなど無く、図書館内にあるカードとPCで検索するのです。現在では考えられせんよね。

今年の夏休みに、大学図書館内のPCの入れ替えや増設を行いました。もうお気づきでしょうか？ 1階の蔵書検索用PCを入れ替え、地下2階にも蔵書検索用PC 1台を設置しました。これは、図書館の検討課題に以前からなりましたが、「地下2階にもPCを設置して欲しい」という投書があったこともあり、実現することができました。また、地下1階のインターネット用のPCも、別の場所で使っていたものと入れ替えを行い、若干ですがアクセススピードが上がりました。

このようにして、機械化から10年経った現在では、利用者の皆さんが使いやすい環境を整えようとさらに努力をしております。お気づきのことがありましたら、お気軽にお申し出ください。図書館内のメッセージBOXへの投書や、メールでのご意見でも結構です。

香雪展示報告 『ベリー侯のいと豪華なる時禱書』

香雪記念資料館主催展示会『絵画の中の四季 実践女子大学所蔵の複製を中心に』（会期：平成17年9月21日～10月7日）に、当館から『ベリー侯のいと豪華なる時禱書』（複製）を提供しました。同書の原本は、現在フランスのシャンティイのコンデ美術館に所蔵されており、中世末期の写本の最高傑作とされています。

ベリー侯とはフランス国王ジャン 世の第三子ジャン・ド・フランスのことで、1360年ベリーとオーヴェルニュを封じられたためベリー侯といわれています。中世において祈りは、聖職者だけでなく、一般の人々の日々の生活に欠かせないもので、日に何回が行われる祈りを「時禱」と呼びました。初期の「時禱書」には、挿絵が施されていませんでしたが、本書が成立した15世紀には、かなりの彩色画が描かれるようになります。本書の月曆絵は、ポール・ド・ランブールとその兄弟によって描かれています。写真は1月のものです。



出品資料：Les tres riches heures du duc de Berry
Revue, Verve, 1940 (745.67 T79R)

* 本間文庫所蔵のため閲覧利用はご相談下さい。



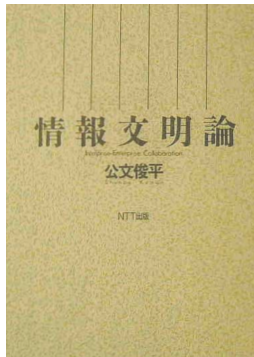
～ グランド・セオリーの魅力～

情報文明論

公文俊平著，NTT出版，1994，503p．
（大学図書館所蔵 361 5 Ku39）

大学 人間社会学部 助教授

小山 裕 司



学生時代の特権は、好奇心の赴くままにあらゆる分野の知識を吸収できることです。就職したり、研究者を目指して専門課程に進んだりすると、自分の暮すごく狭い世界の勉強で汲々とするようになりますから、若い時代にこそ自分の知らない分野、より広い分野の知識を吸収することが重要です。そのために最適な本として公文俊平著『情報文明論』を紹介します。

この本の魅力は、私たちが生きている現代社会を近代文明の最終局面と位置づけて、近代文明の進化を「軍事化」「産業化」「情報化」の位相でとらえながら、文明全体の進化を古代の「宗教文明」から現在の「近代文明」、これから来るであろう「智識文明」というより大きな枠組(グランド・セオリー)で俯瞰するところにあります。

現代の産業の中心が重工業的な大規模なモノづくりから、ケータイやマルチメディアといった「軽薄短小」なコンテンツビジネスへと変わりつつあることは皆さんも感じていることでしょう。この変化は、情報社会的には「近代社会」の「産業化」の局面が成熟に達し、これを乗り越える新しい「突破」としての情報革命の波が表面化してきた段階ととらえることができます。

かつて社会や経済を動かしていたのは国家で

あり、大企業でした。しかし、最近では個人でもネットワークでつながった世界中の人々に対して直接自らのメッセージを伝え、同じ志向を持つ人々が多相的なコミュニティを形成して政治や経済に大きな影響を及ぼすことも可能となりました。情報社会的に見るとこのような社会を動かすルールの変化も、かつての主権国家同士が競った「威のゲーム」から国際的な大企業が世界規模の市場で互いに利益を競う「富のゲーム」、さらにはネットワークにつながった個人やグループが説得と誘導によって自らの信じる「真・善・美」を広げていこうという「智のゲーム」へ、というゲームのルールの変化として把握することができます。

この本が書かれた1994年はインターネットも現代のように普及しておらず、オープンソース・ソフトウェアという言葉すらありませんでした。この10年の変化を私が専門とするコンピューターやソフトウェアの世界だけで考えてみても、この本が指摘していた、当時はまじめには信じられなかったさまざまな可能性が実際の現象として存在し、社会に定着していることに驚かすにはいられません。

細かく分化し、専門化が進んだ現代の学問世界においては、本書が語るような「グランド・セオリー」は検証困難な作業仮説として敬遠されがちです。しかしながら、経済学における「資本論」や精神分析の「夢判断」、人類学分野の「構造人類学」のように、多くの学問は「グランド・セオリー」として俯瞰された見取図を元に緻密な理論化や細部の彫琢が進んでいきます。その意味で、今回紹介した『情報文明論』は情報社会学の古典として広く読み継がれていくに違いありません。また、この本を読んで情報社会学に興味を持った人は同じ著者の『情報社会学序説・ラストモダンの時代を生きる』（NTT出版、2004）読んで、この10年間の思想の歩みを考えてみるのも意義深いことでしょう。

近隣図書館紹介

～第5回 韓国文化院図書室

今回訪問したのは港区南麻布にある韓国文化院図書室である。麻布は日野から見れば全く近隣ではないのだが、今回は番外編としてご容赦願いたい。

同図書室の母体の駐日韓国大使館韓国文化院は韓国文化紹介の窓口として各種情報サービスの提供、日韓交流事業の援助、韓国語講座などを行っており、韓国文化理解のための施設として図書室(8階)と映像資料室(9階)がある。韓国文化院は、最寄り駅の麻布十番駅2番出口からまっすぐ歩いて5分程であるが、この通り沿いはあまり麻布らしさを感じない。

入室して最初に抱いた感想は「あれ、一度来たことがあったかな?」であった(短大図書館と似た雰囲気があるのを後ほど気付いた)。入口正面には児童書・伝記コーナー、右側にはインターネット用PCが2台、壁沿いには時事、文芸、ファッション関係の雑誌が30誌程配架され、その隣の棚には漫画がずらりと並んでいる。表紙から受ける印象はまったく日本のそれらと同じ。漫画を手にとって中味を見ると日本の漫画と見間違えよう。唯一違うのは、当然ながら全てハングル文字が使用されていることだ。



室内は広いとは言えないが韓国の歴史や文化にちなんだ韓国語12,000冊、日本語6,000冊、英語500冊の図書が並んでいる。これらは日本でお馴染みの日本十進分類法NDCではなく、韓国十進分類法KDCで分類されている。書架をじっくり見ていくとハングルと漢字の書名が3:1ぐらいの割合で眼に飛び込んでくる。書架には親切的な日本語のサインもあり、何となく主題だけは分かる。また視覚的に楽しめる料理本や美術全集もある。やはり日本と同じような本が出版されているのだ。印象に残ったのは、FIFA 2002サッカー・ワールドカップ時のマスコミ報道をまとめた数冊にも渡る分厚い報告書。韓国

ではワールドカップの歴史的な位置付けをしっかりと行っているらしい。また、岩波新書や中公新書に非常によく似た外見の叢書。中身を見るとハンゲルの縦書き!。現在流通する書籍のほとんどが横書きなので大変珍しいとのことである。

利用状況について尋ねると、来館利用よりは、電話によるレファレンス質問が多数寄せられる、という。韓国で氷がどのように使われ、食べられてきたのかなど歴史的な変遷や、高句麗壁画に描かれている朱雀の真赤な彩色の原料は何かなどの質問から現在の韓流ブーム関連の質問まで様々だという。地理に関する質問に回答する上で古地図は手放せないアイテムだとのこと。



9階の映像資料室はブースが4つ。文化広報映像や伝統音楽の他、日本で発売されていない未公開映画・ドラマのDVD、音楽K-POPを求めて多くの方が訪ねて来るそうだ。

同図書室は、利用者登録には地域制限はなく、利用者登録さえすれば図書の貸出は可能である。身近で韓国の歴史と文化に触れてみたい方は一度訪ねてみてはどうでしょうか。

< 韓国文化院図書室 >

蔵書：和書 6,000冊 洋書 12,000冊 和雑誌 3種
 韓国語・英語雑誌 27種
 〒190-8561 東京都港区南麻布 1-7-32
 (麻布十番駅より徒歩)
 TEL: 03-5476-4971 URL: www.koreaculture.jp/
 蔵書検索あり

～ 個人情報保護への当館の取り組み～

今年度4月より「個人情報保護法」が完全施行されました。当館では、本学園の「実践女子学園個人情報保護に関する規定」及び日本図書館協会制定の「図書館員の倫理綱領」と「図書館の自由に関する宣言」(下記参照)を照合して「図書館における個人情報の保護に関する内規」を作成し、運用します。図書館は、利用者の皆さんに安心して図書館を使っていただくように努力します。

個人情報の範囲

- (1) 貸出・予約・複写等の資料の利用情報
- (2) レファレンス等の質問に関する情報
- (3) 利用者(卒業生・元教職員)の住所データ

当館の見解と取組

1. 個人情報を第三者に教えることはありません

利用者本人から、現在何を借りているか、何を複写したか、との問い合わせがあった時のみ、学生証または利用証で本人確認を行った上で情報開示します。但し、以前に何を借りたか、という問い合わせには本人からの請求があっても図書館システム上対応できません。

2. レファレンス関連情報は統計処理後学年末に廃棄します

3. 延滞の督促

貸出資料延滞の督促は、これまで通り学科掲示板に氏名を掲示します。

4. 卒業生と元教職員の住所データについて

図書館からのお知らせ(図書館報など)の送付と督促時のみに使用します。

5. 他館との相互協力時について

相互協力では、相手館より求められた所定の個人情報のみを提供します。その際には利用者からの同意を得るようにします。

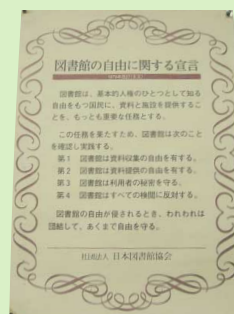
その他 回収した呼出用紙、督促状などは利用終了後にシュレッダーにかけています。

図書館の自由に関する宣言と図書館員の倫理綱領

図書館界では、個人情報保護法が施行される20年以上前から、利用者の秘密を守る取組を行っています。

- ・「図書館は利用者の秘密を守る」
(「図書館の自由に関する宣言」(1979年改訂)の第3条)
- ・「図書館員は利用者の秘密を漏らさない」
(「図書館員の倫理綱領」(1980)の第3条)

利用者の秘密を守る = 個人情報を守る、と言い換えることができます。



❀ ❀ ❀ いんふお-め-しょん ❀ ❀ ❀

2005年12月～2006年3月

大学図書館

冬休み特別貸出

期間：12/12(月)～1/6(金)

返却日：1/10(火)

対象：図書のみ 冊数無制限

指定図書・雑誌は通常通り

冬休み中の開館(12/22～1/6)

開館日：12/26、27、1/6

開館時間：9:00～16:00

試験期の貸出

1/7(土)～1/19(木) 3日間貸出

対象者：大学生・短大生

試験期の開館

1/7(土)～1/31(火)

月～金 8:50～19:30

土 8:50～17:00(1/7(土)のみ18:00まで)

2月以降の開館(2/1～)

開館時間：9:00～16:00

春休み特別貸出

期間：1/23(月)～3/24(金)

返却日：4/10(月)【卒業予定者3/18(土)】

対象：図書のみ 冊数無制限

指定図書・雑誌は通常通り

休館日

12/22(木)は書庫整理のため

1/20(金)、1/21(土)はセンター入試のため

2/4(土)～2/7(火)は入試のため

2/20(月)～3/4(土)は蔵書点検のため

3/6(月)～3/7(火)は後期入試のため

3/25(土)～4/4(火)は新年度準備のため

短期大学図書館

冬休み特別貸出

期間：12/12(月)～12/22(木)

返却日：1/10(火)

対象：図書 冊数無制限

AV資料 6点

指定図書・雑誌は通常通り

冬休み中の開館(12/22～1/6)

開館日：12/22(木)

開館時間：9:00～16:00

試験期の貸出

1/7(土)～1/20(金) 3日間貸出

試験期の開館

1/7(土)～1/31(火)

月～金 9:00～18:15

土 9:00～16:00

2月以降の開館(2/1～)

開館時間：9:00～16:00

春休み特別貸出

期間：1/23(月)～3/18(土)

返却日：4/10(月)【卒業予定者3/18(土)】

対象：図書 冊数無制限

AV資料 6点

指定図書・雑誌は通常通り

休館日

12/7(水)は書庫整理のため

2/1(水)～2/10(金)は入試、書庫内点検のため

3/9(木)は短期大学の後期入試のため

3/20(月)～4/4(火)は卒業式、新年度準備のため

詳細や変更は掲示・ホームページにてお知らせします。

編集後記

今号には、重要なお知らせとして個人情報保護について当館の取組を掲載しました。7ページ目をご覧ください。

さて、2回に渡って連載した「パリの図書館スケッチ」いかがだったでしょうか。右岸と左岸、パリを訪れる機会があればカルセルの橋に立って思いをはせてみてはいかがでしょうか。

Library Mate 第35号 2005年12月

発行所 実践女子大学図書館
東京都日野市大坂上4-1-1
URL:<http://www.jissen.ac.jp/library/>
実践女子短期大学図書館
東京都日野市神明1-13-1
URL:<http://www.jissen.ac.jp/library/jcol/>

発行責任者 日 浅 和 枝